

中央教育審議会 学校における働き方改革特別部会 第3回

教員の行うべき仕事とは “指導文化”への挑戦と役割分担の検討(試案)

2017年8月29日

妹尾 昌俊

教育研究家、学校マネジメントコンサルタント

文部科学省 学校業務改善アドバイザー

NPO まちと学校のみらい 理事

senoom879@gmail.com

<http://senoom.hateblo.jp>

“子どもためになるから”で思考停止してはいけない。

前例・伝統を見直さず、
ビルド&ビルドに。

★前例・伝統だからと思考停止せず、
今日的な有効性を問い直そう。

○そもそもなんのためのものかを確認し、別の手段・方法がないかの比較検討を行う。

子ども（児童生徒）のためになるからと、仕事を
手離せない。

★子どものためとばかり言うな。

重点課題とビジョンをもとに、
仕事をやめる、減らす、統合しよう。

○課題とビジョンに照らして“より”子どもたちのためになることに、希少な資源（人、時間、予算等）を充てよう。

わたしが頑張ればよいと
業務やトラブルを抱え込
んでしまう。

★教員でなくてもできることは手離れさせる
とともに、チームで対応できるようにしよう。

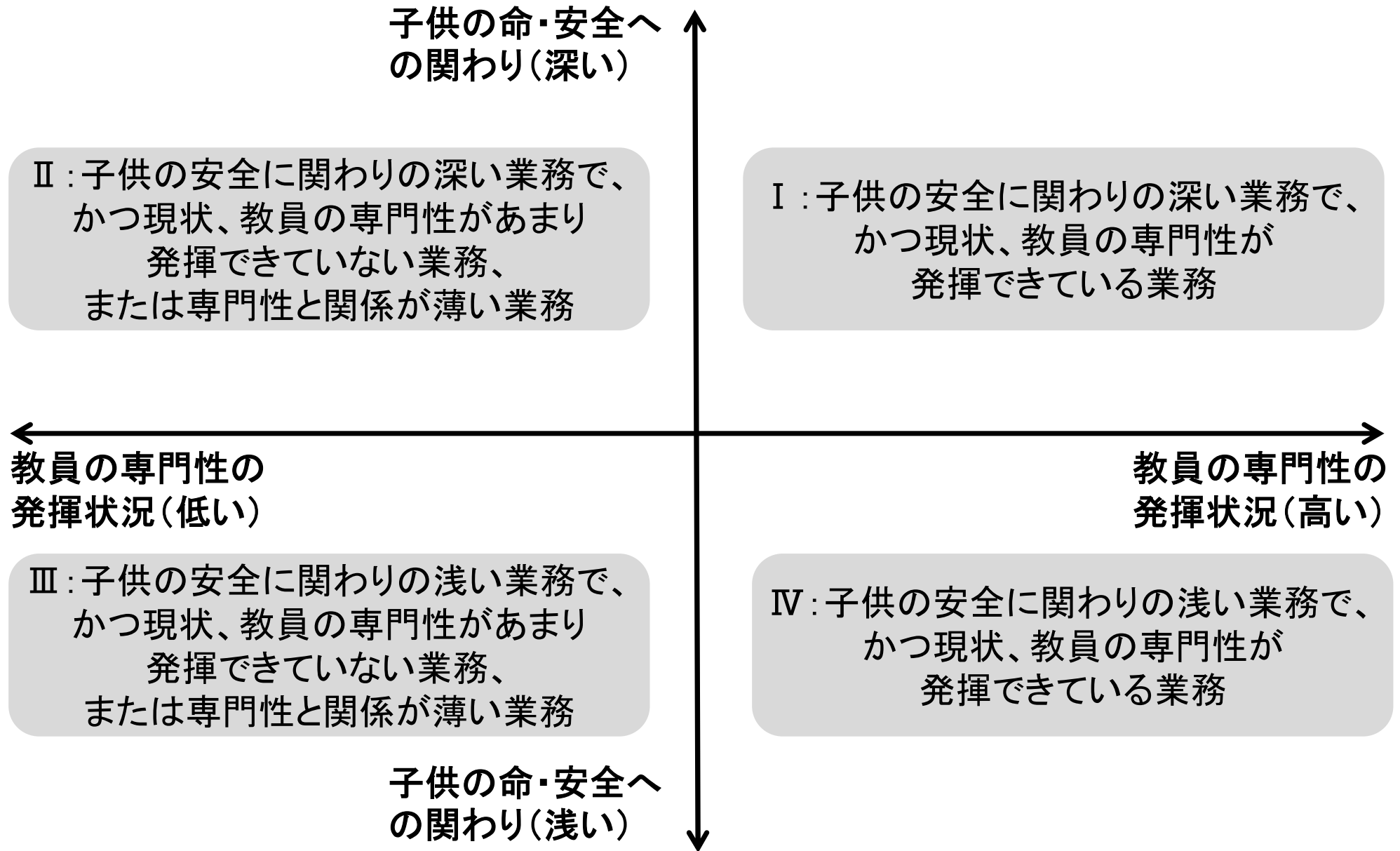
○「これはあなたでなくてもできること」を伝えていこう。
○担任任せにし過ぎない。

あふれる“〇〇教育”、“××指導”

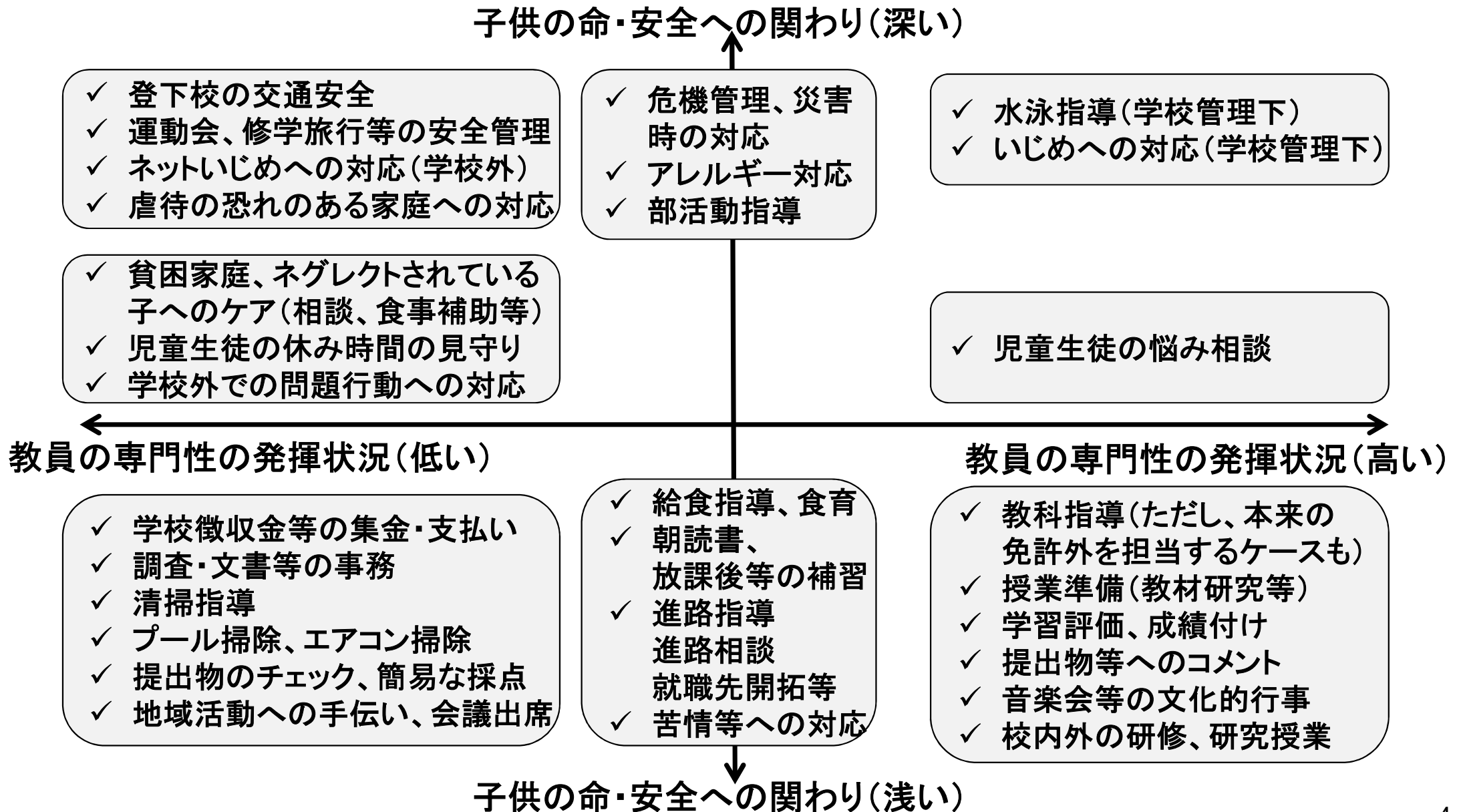
藤原和博(2013)『負ける力』(ポプラ社、p.211)

いまでも、一人の教員が教科を上手に教え、
生活指導とすべての児童生徒に関わる事務手続きをし、
防犯や防災に気をつけながら、
一人一人のアレルギーをチェックし、
AED(心肺蘇生用の医療機器)を使えるようにし、
環境教育や情報教育に慣れ、
福祉ボランティア教育と国際理解教育を教え、
さらに食育にも消費者教育にも気を配り、
尖閣諸島や北方領土への意識を盛りたてて日本人として誇りを持たせ、
おまけにスポーツ指導や部活を担当しながら、
要望が強くなりがちな保護者の声に応える
……………なんて、一人の人間のやることとして明らかに無理があります。

教員が行うべき仕事とは！？ 仕分け、役割分担を考える視点例



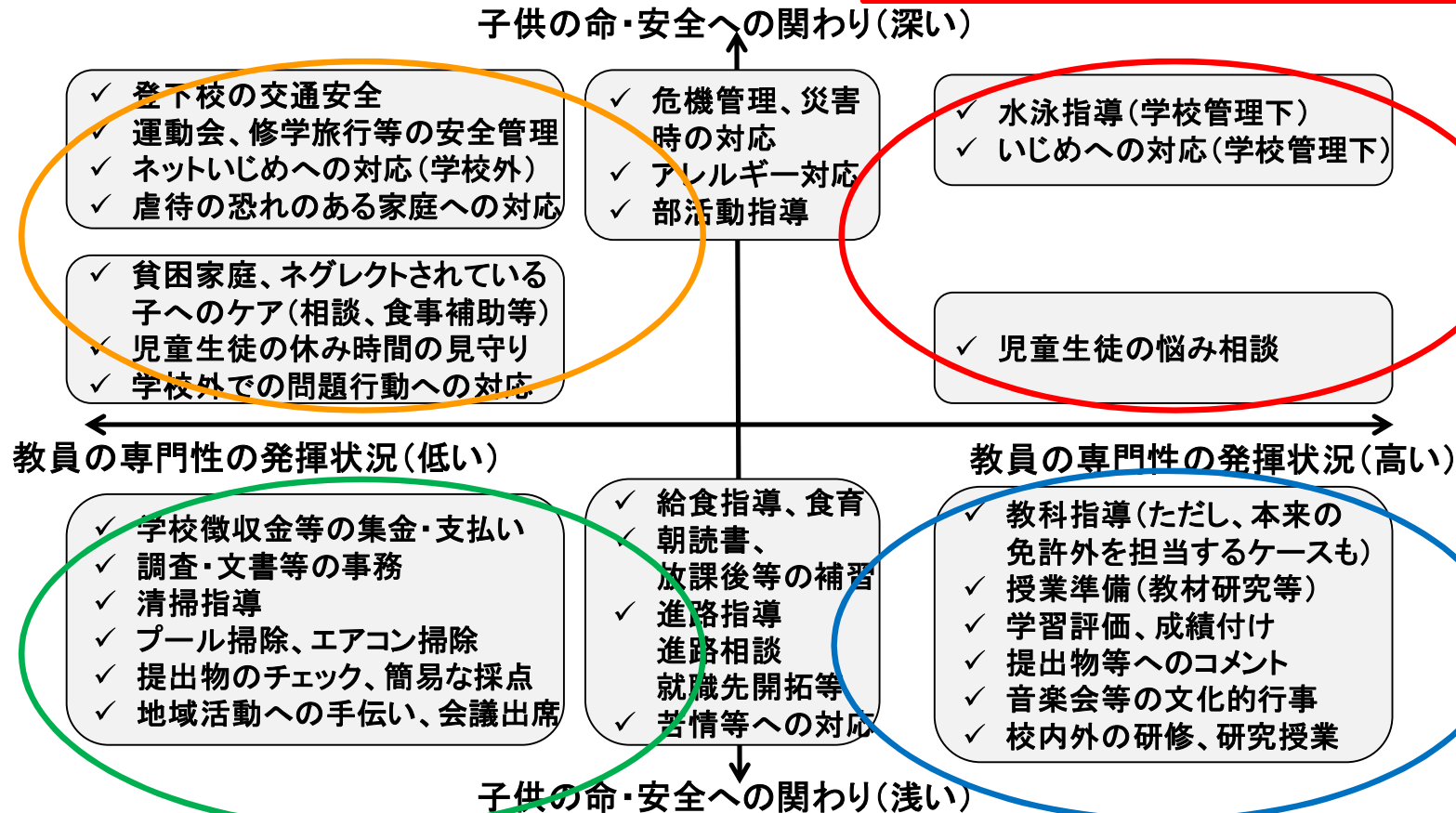
教員が行うべき仕事とは！？ 仕分け、役割分担を考える視点例



仕分け、役割分担の検討例

学校教育外にできるものや専門職との一層の連携・分担を検討すべき領域（部活動、交通安全、虐待家庭への対応等）。問題発見は学校の役割としても、支援は市区町村の福祉、警察が実施する等。

学校として、教員として責任の重い領域。ただし、専門職との連携・分担が一層必要なことも多い（部活動指導員、SC等）。



可能な限り、学校外、教員外の業務とするべき領域（公会計化、外部委託等の推進）。
 学校の役割とする場合でも、アシスタントや学校支援ボランティアの活用等を進めやすい業務。

教員が行うとしても、国・教委による業務負担軽減（教科担任制や定数改善）、学校での業務改善（行事の精選や電話対応時間の見直し等）、教職員間の業務量の調整、連携・協力（教材共有、教え合う等）の必要性が高い領域。

さらに検討が必要なこと

1. 「教員の専門性の発揮状況」をどう判別するか
「専門性」をどこに求めるか？
2. 分かりやすくするために今回は2つの視点（軸）で考えたが、もっとよい整理や、もっと必要な視点ははないか？
 - 各学校のビジョン、重点課題によっても、施策の重要度と優先度は異なる。
例：ある中学校では、小学校段階の学習につまずきのある子が多い。
⇒教員が補習等を実施しなければならない、という意味ではないが、教員は、小学校や地域と連携して補習を企画したり、カリキュラムの工夫をこらしたりする。
 - 費用対効果、時間対効果などの視点も必要。
「やらないより、やったほうがよいでしょ？」はコスト度外視の暴論。
例：指導要録で学籍情報は必須だとしても、学習状況、しかも観点別評価は、教員の限られた人手と時間のなかでどこまで必要なのか？
3. 「でも・・・教員（or 教頭）以外にやってくれる人はいないんです」という“受け皿論”にどう対処していくか？